身寄りない病者に最期の安らぎを

東京・山谷のホスピス「きぼうのいえ」山本雅基さんに聞く

東京・台東区の日雇労働者の街、山谷（さんや）で、カトリック信者の山本雅基さん（44）が個人で始めたホスピス「きぼうのいえ」は、余命幾ばくもなく、しかも身寄りや行き場のない人たちに、人生最期の安住の地を提供して五年以上になる。病院併設の施設ホスピスとは違い、デイサービスや訪問看護・介護などを利用し、普通の生活をしながら死を受け入れていく在宅型ホスピスだ。これまでみとった人は約六十人。「辛酸をなめつくした人たちが、残りの人生を幸せに生きてくれれば」と願いながらケアにあたる山本さんに話を聞いた。

「きぼうのいえ」は、簡易宿泊所が密集する〝ドヤ街〟の真ん中にある。礼拝堂付き四階建て全室個室。毎日の食事は入居者の健康状態や細かな好みを反映させている。毎月一回、キリスト教の礼拝があり、また音楽によるみとりを取り入れるなど、スタッフやボランティア約三十五人が協力し、癒やしの場をつくっている。

現在、緊急一時保護施設「なかよしハウス」を含め、40代から80代の三十二人が入居。その65％が元ホームレスで、35％は主に台東・荒川・墨田の三区で細々と生計を立てていた独り暮らしの人々。それぞれ末期がんやHIV、心臓病などの重病を抱えている。

山本さんは入居者の遺影が置かれた礼拝堂で五年半を振り返る

日航機墜落事故が転機

山本さんが「きぼうのいえ」を始めたきっかけは、一九八五年八月十二日の日本航空機墜落事故。テレビ画面に映った惨状や遺族の嘆きに直面し、「こういう地獄のどん底に突き落とされた人々と共に歩こう。こういう人々の悲しみを減らすためにだけ生きよう」と決意した。

二〇〇二年、天涯孤独の身寄りのない病者のために二億円以上の借金をし、山谷にホスピスを建設した。看護師の妻と共に不眠不休で受け入れを行い、運営費は入居者の生活保護費で賄い、毎月のローンは寄付などで返済してきた。

最初の二、三年は、自分自身との戦いだった。入居者の多くは、人から愛され、優しくされることに慣れていない人々。金銭や損得関係の世界で生き、人生でさんざんな目に遭ってきた彼らに、愛情の世界を信じてもらうことは難しかった。

優しく接すれば、「こんなに優しくして、私の臓器を売るんじゃないですよね」などと言われる。山本さんは自分の真意、愛情が伝わらないつらさ、彼らの行き場のない感情の爆発に接し、自分自身、うつ状態になり、パニック障がいに陥ったこともある。しかし、そのたびに「自分には彼らに寄り添うことしかできない」と立ち上がってきた。

〝愛情のシャワー〟を

愛を信じていない彼らが、心を武装解除できるように、「きぼうのいえ」では人間関係を通して、とにかく〝愛情のシャワー〟を浴びせていく。山本さんは、この五年半のかかわりの中で、「愛情は伝わる」という確かな手応えを感じ始めている。

「88歳の女性は、『あんたたちがどれほど愛してくれているか分かったから、いつ死んでもいい』と言いました。またある男性は『もう怒るのはやめました』と、人が変わったようになりました。一人一人、神様の愛情を感じる能力は備わっています。それが閉じていただけなのです」

活動の原動力は、祈りとユーモア。すべてを乗り超えるエネルギーだ。

「私たちが怒ったらおしまいです。入居者から罵声（ばせい）を浴びせられても、落語のような口調で『そうきましたかぁ。あなたもよく言ってくれますねぇ』などとユーモアで返すのです。うちの看護師さんは、性格の難しい入居者を見て言いました。『あらどうしましょう。この人にどうやって愛を伝えていきましょう』と」

山本さんは、スタッフらの言動が愛情あふれるものとなるように、時間の限り祈り、霊的読書をし、そしてできるだけスタッフと霊的な深い話をし、アドバイスを送る。

「『きぼうのいえ』は教会そのものなのだ」という意識を持って、彼らを精神面で支えているのだ。

ヘルパー派遣も

二年前に著書『山谷でホスピス始めました。』を出版した山本さんの夢は、「山谷をホスピスにすること」だ。

「現在、山谷に暮らす人々は約三千五百人。『きぼうのいえ』を百件建てれば、皆をケアできますが、とても無理です。そこで二年前、〝ドヤ〟にヘルパーを派遣する介護ステーション『ハーモニー』を立ち上げました。『きぼうのいえ』の精神を、ヘルパーを通して山谷の人々に伝えていきたいと思っています」

支援先は、郵便振替〇〇一三〇―三―六六四八四四「山谷・すみだリバーサイド支援機構」。